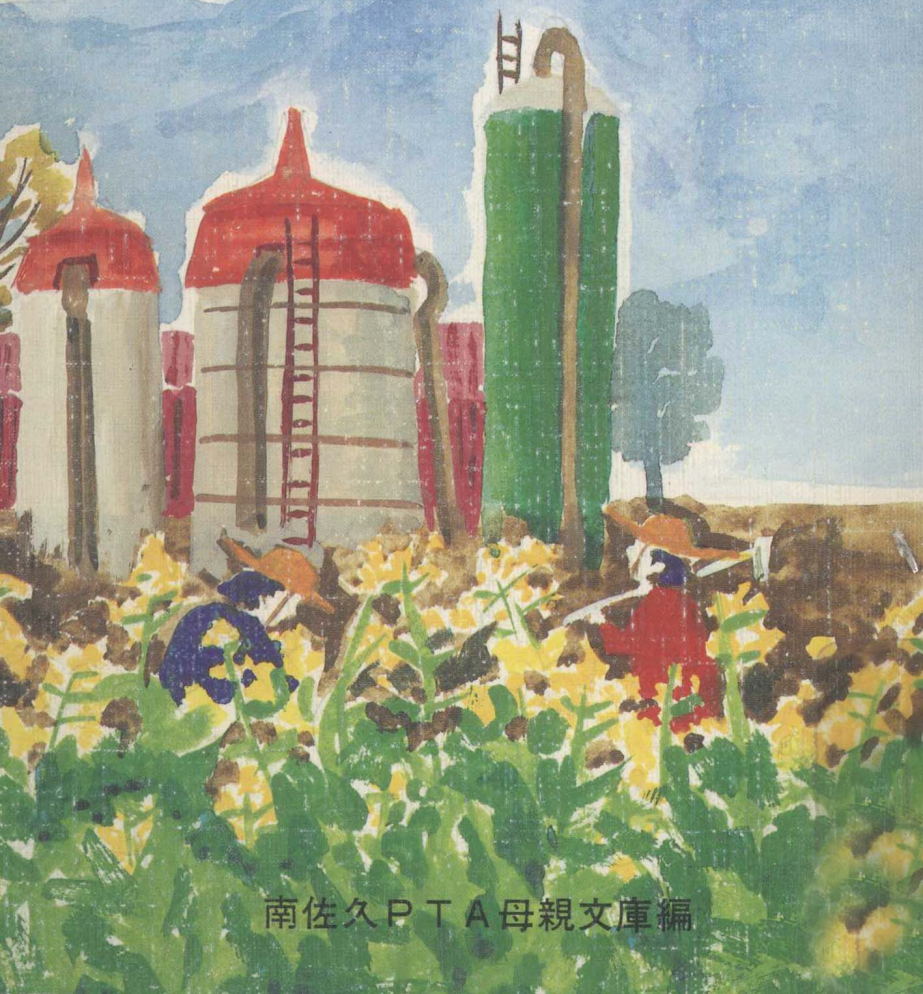


佐久に生きる母さん

—戦後の母親たちの手記—



南佐久PTA母親文庫編

佐久に生きる母さん

千曲川文庫 ⑤

昭和58年10月15日発行

定価 1,200円

編 集 南佐久PTA 母親文庫

発 行 者 中 沢 道 保

発 行 所 株式会社 櫟<いちい>

〒384-01 長野県佐久市中込337 菊地ビル2F

電話 (02676) 3-0018番

振替長野6-10167番

明光プロセス・白田活版株式会社

(落丁本、乱丁本はお取替えいたします。)

I S B N 4 - 9 0 0 4 0 8 - 0 6 - 9

佐久に生きる母さん



目次

〔昭和36年〕……………9	大沢 金井 冬
〔昭和37年〕……………12	佐久町 横森 たみ子
〔昭和38年〕……………14	切原 佐藤 みや子
	南牧 有坂 けさ子
	切原 井出 てる
〔昭和39年〕……………32	切原 鷹野 文子
	大沢 鷹野 幸代
	川上 横山 幸子
〔昭和40年〕……………37	切原 冲浦 久子

〔昭和41年〕……………44	田口 秦 かづ子
	平賀 小林 たつ子
	川上 由井 とよ江
	切原 草間 八千代
〔昭和42年〕……………53	田口 清水 文子
	大沢 吉岡 栄子
〔昭和43年〕……………60	白田 小林 しげ
	大沢 木内 和子
〔昭和44年〕……………66	

〔昭和45年〕……………70	白田 成田 つるよ
	大沢 岩波 とくじ
〔昭和46年〕……………75	平賀 六川 せい子
	岸野 木内 悦子
	野沢 茂原 久子
	野沢 高見沢 あい子
〔昭和47年〕……………86	切原 柳沢 とき子
	八千穂 杉本 ユキミ
	切原 草間 くに子

表紙絵……………横井一郎
題字……………浅沼郁夫
文中カット……………水間千春

野 沢 木 曾 幾 代
白 田 井 出 静

〔昭和48年〕……………95

桜 井 白 田 か づ
野 沢 箕 輪 啓 子
八 千 穂 須 田 も と 江

白 田 島 住 子
切 原 平 林 ま ち 子
切 原 柳 沢 千 津 子

〔昭和49年〕……………108

桜 井 白 田 か づ え
八 千 穂 狩 野 つ る 子
切 原 小 林 け さ む

八 千 穂 須 田 つ ね 子
泉 高 橋 梨 香
泉 荻 野 あ き 子

〔昭和50年〕……………119

野 沢 山 浦 志 う
切 原 油 井 二 子
中 込 坂 手 孝 子

〔昭和51年〕……………123

中 込 岸 上 英 子
野 沢 道 上 英 子

野 沢 小 林 き よ 子
白 田 小 林 宜 子

中 込 小 栗 よ し い
八 千 穂 須 田 淑 江

平 賀 池 田 貞 子
野 沢 富 永 正 子

〔昭和52年〕……………143

泉 小 林 き よ 子

白 田 小 林 宜 子

中 込 小 栗 よ し い

八 千 穂 須 田 淑 江

平 賀 池 田 貞 子

野 沢 富 永 正 子

中 込 古 谷 と み 子

平 賀 依 田 け う 子

八 千 穂 須 田 良 江

八 千 穂 山 田 静 子

〔昭和53年〕……………152

切 原 井 出 京 子

野 沢 小 沢 ま つ 子

切 原 菊 池 園 枝

八 千 穂 佐 々 木 す え じ

中 込 大 工 原 綾 子

白 田 土 屋 ヨ シ エ

野 沢 市 川 律 子

白 田 中 沢 千 恵 子

〔昭和54年〕……………172

大 沢 功 刀 若 子

八 千 穂 佐 々 木 京 子

八 千 穂 西 沢 ま き 代

野 沢 平 林 千 里

白 田 清 水 か ほ り

平 賀 中 島 鶴 子

平 賀 青 柳 良 子

野 沢 白 田 敬 子

中 込 清 水 和 子

平 賀 鈴 木 位 子

白 田 土 屋 と き 子

切 原 浅 川 幸 江

平 賀 江 元 ヒ デ 子

中 込 小 林 光 江

野 沢 三 石 裕 子

白 田 山 寺 と も 子

白 田 井 上 恒 子

桜 井 金 森 ひ ろ 子

平 賀 内 藤 貴 子

野 沢 佐 々 木 静 子

〔昭和55年〕……………195

白切
田原
市鷹
川野
恒文
子子

短

歌

.....
269

野中野白野中野中切白切野
沢込沢田沢込込原田原沢
井宿沼佐々白稲井荻木井土田
出岩田田々田垣出原繼出屋中
道益知トミ久喜久しみの幸
子代子都江子代子の子子子

〔昭和56年〕

.....
242

大田佐白八八野野八大大小小野白平田白切切切切平中大大
沢口久田千千沢沢千沢沢千沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢沢
吉横横船中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
岡山森崎島島島島島島島島島島島島島島島島島島島島島島島
栄つた美よし雅今照民幸てる里木都映一す八京久た耐みとく
子ねみ代子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子
ね子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子

中扉写真.....「川かみ」表紙から

川佐大野中野切白青佐
上久沢沢込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込
由土堀内竹須小草間藤美静
井屋込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込
とよ江真幸ともよし江江江江江江江江江江江江江江江江江

詩

.....
279

川田中八切野岸野
上口込千原沢野沢
油秦高島小加岩井
井野崎林けさのり悦
里かづ和子みよ子子子
子子子子子子子子子子

俳

.....
277

○この本はPTA母親文庫南佐久配本所の文集「川かみ」創刊号から十二号までのなかに収録されたものなから掲載しました。

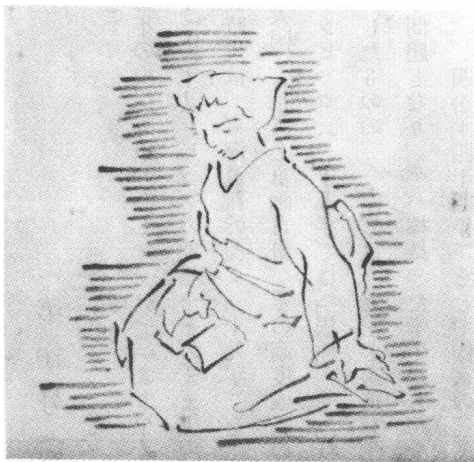
○掲載文については原文をそのままに収録させていただきました。

○各文の最後の（）内の数字は掲載された年代を表わしております。

○掲載は真実感のあるもの、時代感のあるもの、地域的特色のあるもの

を基本に、一人一篇を原則としました。

昭和
36年
)



昭和
45年

その頃の世相

創刊号（昭和36年）

～

第10号（昭和45年）

三十五年の安保闘争のあとを受けて「より早く、より高く、より遠く」のオリンピックの理想をそのまま実現しようとした高度成長時代は、東海道新幹線（三十九年）を生み出した。

「世界の大国・日本」と自画自讃。その高度成長のハイライト、東京オリンピック（三十九年）では「根性」や「特訓」がクロージアップしたものの、一面では、過密と過疎を生み、公害が全国各地で問題となり、ゲバ棒持った学生たちが全国各大学で暴れ回った。（四十～四十四年）そして作家の三島由紀夫も日本刀を持って東京・市ヶ谷の自衛隊に乱入、あげくの果ては割腹自殺。（四十五年）。

信州人

大沢 金 井 冬

結婚以来初めて、横浜に住む兄の病氣見舞に出かけた。娘の頃東京に足かけ七年住んだので、今度の横浜行きは嬉しいものだった。なつかしい母校を、先生を尋ねたり、かつての職場も尋ねたが跡かたもなかった。

住んでいた銀座も、十九年前とは趣が変わっていた。今は消えてしまって、見当もつかないが、それでもこの辺かと思つて昔の数寄屋橋を想い浮かべ乍ら、あちらこちらと迷子を探すように歩いた。「君の名は」の真知子でなくなつて、四丁目の角で待ち合わせるよりは、数寄屋橋の方が間違ひなくて人通りも少なくて、都合がよかつたものだ。恋人に限らずこの辺に住む人はよく数寄屋橋を利用したものだ。あの頃の店を、建物を、そし

て想い出を探し出す事は嬉しくもあり、又悲しいものだった。

従兄の家へも寄り、夜の八時すぎて、東京駅から京浜線に乗った。つり革も空いておらず、朝五時に家を発つて来て、さんざん歩き廻つた私は、くたくたに疲れていた。どんな小さなすき間でも体を支えてくれる処があつたらはしかつた。つり革につかまっている人達の間をすかして見ると、奥の方に人の掛けていない場所がある様に見えた。私は肥つた体をよじる様にして、人をかき分け、かき分け奥へ入つて行つた。そこには、マンボズボンで赤い上着を着た二十歳位のおんちゃんやんが長々と寝ていた。私はびっくりした。こんなに大勢で、つり革も足りない程押し合つているのに、この若い男が長々と寝ているなんて……夜のせいか、主に男ばかりの乗客はそのまわりにぶら下つていた。みんなは疲れていないのかしら、だが私はとても、この若僧をこのまゝにして置く事は出来ない。

へたへたと座り込み度い程、つかれているのだから……この男が起きてちゃんと掛けたら、他に五人は充分に掛けられるのに。気の強い私は、思い切つてその男の前に出た。そして男の頭を持って「一寸ごめんなさい」と言つて、ぐつと身長をちぢめる様に押した。男は酒に酔つて眠っていたので、体はそのままでの字に曲つて動かない。少し座席が出来たので六十キロを無理に押しこんだ。大きなおしりが、ずり落ちそうではあったが楽になつた。やれやれと思つて、何気なく見回すと、つり革氏達が一斉に私の顔を見ているではないか。私は恥ずかしいよりも、都会の人の意気地なさを笑つてやりたい気がした。「そんな男一人位どかせる事が出来ないのですか」と。

目を閉じて、二つか三つ駅を過ぎたと思う頃、突然大きな声で「こら寝ているやつがあるかつ、起きろつ、お前一人をねせて他の者が立っているという手はない、おいつ、おきろつ」と言つた。

はつと目を開けると、たくましい体の中年紳士が酒酔い小僧をゆり起こしていた。みんなの視線は又この紳士に集中した。紳士は「おい、おきんのか、人の迷惑も考えずに寝ているつもりか、それならこうしてやる」と、いきなりその男を座席からころがり落した。みんなは一瞬ぎよつとした。私は彼が起き上つて、なぐつて来るのではないかと、じつと見下していた。だが深酒で眠つたらしい彼は、二、三回体を左右に動かしたきり眠つてしまつた。紳士は「さあ掛けましょう」とつり革氏達に言つた。つり革氏達は、一寸不安そうな様子乍らも、腰を下した。紳士は私の右どなりに巨体を下すと、両手で若僧の体を前に押しやつた。私は何だか味方が一人現われた様な気がして、胸がすうーとした。早速「いやなのがおりますね」と、言うのと、「全くあきれたものですよ、こういうのが、うようよいあるから、世の中は良くなりません。世間を甘く見ているんですねえ、自分で人

生を目茶目茶にしてしまふんですよ、誰かが時折
びしつとしめてやりませんとねえ。僕は軍国主義
も嫌いだけれど、こういうのもたまりませんよ。」

と話しつづけた。私は「でも都会の皆さんは、な
かなか我慢強くて居られますこと、この様な青年
の行為を、ただ見ておられるだけで、注意もなさ
いませんし、どかせもしないで、立っていらつし

処を御存知ですか、夏休みに勉強に行った処です
よ。」もう若僧の事など忘れて私達は話し込んだ。
紳士は横浜駅へ着くと立ち上がり「僕はここでお
ります。久し振りに若い頃を思い出しました。有
難う」といつて降りて行つた。私も昔から知つて
いる人と別れる様な親しさで「さよなら」といつ
た。急に電車は空いて来た。

やるからおどろきました。貴男様のなさる事を、
皆さんがおどおどして見ておられましたよ、私は
信州人ですが、女でも、私の町の中で、こんな
事をしている人があつたら放っておきませんよ、
矢張り、今なされた様にゆり起して注意しなくて
はおられません。」と、言う紳士は、大きな声で
「あつ、貴女も信州ですか、僕も信州ですよ、信州
はどちらで……ああ佐久ですか、僕は上諏訪です。
佐久はどちらで……川上？高野町ですか、白田・
野沢・中込は、学生時代みんな歩いた町ですよ。
ああ野沢ですか、なつかしいなあ……前山という

左どなりに静かに眠っている様子に見えた老人
が、いきなり「今降りた方も信州、貴女も信州、
私も信州ですよ。今までお二人の話を聞いていま
したが、矢張り、信州人は氣質が似ていますねえ。
私も貴女の乗った二つ程前の駅から乗りました。
そして、この酔払いの頭を貴女と同じ様に押して、
腰を掛けたんですよ。信州人でなければこんな無
茶はやりませんよ。もしこの男の仲間と一緒に乗
っていたら、我々は今頃どこかの駅で引きづり降
ろされて、因縁をつけられて金を取られた上に無
事な体ではないでしょうから……それが怖くて

辛くてもみんな黙ってぶら下がっているんですよ。信州人はその我慢が出来ない、正義感ばかりではないんですよ、我がままな気持ちも多分にあるのです。自分を危険にさらす事を承知していてもやらなければいけない。私は今夜つくづくそれを知らされました。もつと自分を大切にすることを考える方が利口なんですがねえ」

「はあそうですねえ」と、私は合槌を打ち乍ら目茶苦茶になぐられて、取られて、兄の家へなど行かなくなっている自分を想像しながら、ぶるつと体をふるわせた。足もとのあんちゃんをよく眠っている。

(昭三六)



色

佐久町 横 森 たみ子

私は、自分が色というものに対して何か特殊な感覚を持っているのかな、と時々思う。だれでもみんなこうなのかしらとも思う。

私は自分が生きてきた過去の間にかかせつばつまった状態におかれたとき、ふしぎにその思い出す事柄と共にその時の持ち物の色、柄、があざやかに浮びあがってくる。

主人が病床にあった頃長男が野沢中学へ入学した。入学式には必ず保護者が同伴という通知だった。私はその時まだ乳呑児だった女兒を背負って学齡前の三番目の男の子と病夫をおいて出かけるければならなかった。(その頃は戦争末期で世の中は食糧難にあえいでいた) 止むを得ず数え年七才の子にするをするようによくいい聞かせて、お

にぎりを作ってお重箱へいれて、「おひるになつたらこれをお父ちゃん枕もとへ持って行って、お父ちゃんと食べるんだよ」といい聞かせてふる敷へつつんだ。その時のふるしきの紺色に白く模様をあらわした色までその日の事を思い出す度にはっきり浮んでくる。

夫が病臥中私は六年生位だった長男を相手によく汲取りをやった。そうした時赤ん坊を背負うわけにいかないのが二番目の男の子に末の女の児をおんぶさせた。小学二年生位だった男の子は体に不似合な、大きな荷を背負わされて、後へひきかえされるような格好をして、それでも島のはしの方で友達とおにごっこなどやってかけ歩いていた。その時の背負いぶとんの、物資の無い頃で自分のメリンスの長じゆばんのお古で作ったえんじのんだら模様が必ずはつきり目に浮んでくる。私は大きな荷を背負わされた男の子が友達と遊ぶのにどんな風に遊ぶのかと思って、見守った事を思い

出す。動きの不自由な子は休みときめられた木へつかまっただけばかりいたようだった。一寸はなれてはすぐつかまっただけのようだった。それでも息を切らしながら、アハアハと笑いさざめいていた。

その後三年の病臥の後他界した夫の臨終を知らせる為に電話を隣家へ借りに行つた時の、自分のはいていた下駄の緒が手製の、古い帯を改造した紫色がふしぎにはつきり目に浮んでくる。

亡き夫の臨終の日の我が下駄の緒の紫を今も忘れず、胃を病むことを持病に持った私は胃の為によく医者にもかかった。ある病院では、手術をするようにいわれた。その病院を出る時の自分の下駄の緒が又ビロードの紫に白の花模様だったことを思い出す。私は手術に要する費用の捻出と、幼い四人の子供達のしまつを思いわずらいながら、その紫の緒を見つめてあるいた。そんな私は病臥することを何回となくくりかえした。乳呑児をもつ

頃は胃の激痛に耐えて、授乳しなければならなかった。早速かけつけてくれた主治医に痛み止めを

注射してもらう為に、自分の掛布団をはねた時、

添い寝していた女の児の着ていた着物が、自分が

子供の頃の下着の赤地に白一色で花模様を染めた

木綿だった事をまざまざと思い出す。コケシのよ

うな格好をしてねている女の児の袖口が白かった

こと、授乳する為に、赤ん坊の胸の辺がペシャン

コに平たい格好でかかしのように両袖を両側へ、

つんとおぼしてねていた格好まで目に浮んでくる。

ふしぎにそれだけが浮かんできてふとんの柄も自

分の着物も一切思い出せない。今高校二年になっ

ている娘のその時の赤ん坊だった顔すら皮肉にも

思い出せない。

その後の生活では私に思い出させる色がない。

その後の方が、私の生活にゆとりがあるのかも知

れない。

(昭三七)

遂に起こした六反歩

切原 佐藤 みや子

「さあ、もう一頑張りだ」と夫の声、暖かい春の日の
お昼前のひととき、私達親子五人は、シャツ一枚
で終盤戦に入って残り少なくなった開墾に全力を
そそいでいる。

長い冬眠生活で少しは本も読めたし、種々の講
習会や講演会又は歌の会、PTA母親文庫の話し
合いの会にも出席出来て、私の能力なりに収得出
来た事を本当に幸福に思っている。今年は、殊更
冬が長かったのでエネルギーの補給も充分出来た。
やがて芝草の中から、やわらかい露のとうが芽を
出す頃ともなれば、農家もボツボツ多忙となる。

例年に比して、寒波が甚だしく一月下旬から二月
一ぱい土が凍って開墾する事が出来ず、三月に入
って漸く鍬が振えるようになった。幸い此処二、

三日暖い日が続いたので、春休みになった子供達も動員して開墾に大童だ。思えば一昨年共同防除施設の完備している此の山を地主から買い受け三ヶ年計画で畝を下してから丁度三年目、最初の年は直径一米深さ一米五〇厘の植え穴を三十三ヶ掘り、其の中に太いそだ、次に木の葉、堆肥と云う順序に三層もの手を掛けてやっと一つの植え穴が出来上り、其の上に林檎の木を植える訳で、それも見渡す限りの草原に、大木が根を縦横無尽に張りめぐらし、大きな石が掘れば掘るほどに出て、全く血と汗の明け暮れの日々が続き、遂に夫は過労のため胃腸を悪くして一ヶ月近くも床につく身となり、佐久病院のレントゲン検査の結果は、胃下垂との事だった。三度三度の食事療法は云うに及ばず、薬草を煎じてすすめ、果ては針灸迄も試み、ひたすら快復の日を待つのみで、其の時の私の不安と焦躁は筆舌に尽す事が出来なかった。幸い暫く静養の後には又元の健康体に戻り、昨年は何事も

なく三十三の植え穴と三反歩の開墾をする事が出来た。寒風肌を刺す寒中、横なぐりの雪のつぶてを全身に受けて、唯ひたすら完成の日を夢見て、「コツコツ」とひたむきな努力を続けて今日到達する事が出来た。他人様からは、「そんな神武天皇に表彰される様な事をしねてブルでつっこくりやわきやあねいや」などと云われましたが、傾斜が強く土地条件も悪く、其の上一番私達を悩ますのは経済問題だった。お金さえあつたら本当に他人様の云われるように出来たのに。

しかし金に替えられぬ人間の信念と努力で、此の困難に打勝つ事が出来て本当に尊い経験の出来た事を幸福に思っている。足掛け三年の日時を費した赤土の開墾果樹園は見事に堀り起こされ間作の一六四本を加えた二三〇本の林檎の木が整列している。他の畑へかり植えしてあつた樹齢六年目の木には今秋は赤い実が、そして黄色い実がつくと思う。